



木
金子みすゞ

お花がちつて
実がうれて
その実が落ちて
葉が落ちて
それから芽が出て
花が咲く
そうして何べん
まわつたり、
この木はご用が
すむかしら。

2026年4月
野毛山幼稚園

この「木」という詩は「金子みすゞの心」のvol. 1(2024年4月)で紹介をした詩です。

大正の童謡詩人 金子みすゞさんは生涯で512もの詩を書きました。

「いのちの尊さ」「生かされていることの喜び」「見えないけれどもあるということ」

小さな命をいとおしく大切に想い、優しい眼差しのみすゞさんは、相手の立場になり、時に相手の立場より低くなって物事を見ます。見方を変えることで、今まで気づかなかったことに気づくことができ、見えなかったことが見え、聞こえなかったことが聞こえてきます。

園庭の大きい木…トウカエデ。今年も葉っぱが茂ってきました。

この木の来歴をお話すると……

第6回生 あやめ組の子どもが小学校に入って扁桃腺の手術で亡くなりました。ご両親の悲しみは深く、その子を覚えて忘れないようにと植えた記念樹です。はじめは添え木の必要な小さな木だったそうです。ご両親はその成長を楽しみに時々幼稚園を訪れていたそうで、現在は、弟さんたちがこの木の成長を楽しみにしておられます。

大きくなったトウカエデは2019年2月に横浜市の名木古木に指定されました。

最近、倒木のニュースが続いていましたので植木診断してもらいましたが、「大丈夫、枝が自然にのびてとてもいい形になっていて素晴らしい木だ」ということでした。

幼児期は人生の根っこの部分。

しっかり根をはり、目には見えませんが、土の中では、木を育てようとする…子どもも同じです。自らが育つ力を蓄えている…そのことは本園の方針につながります。

春には芽を吹き、夏には茂り、秋には紅葉して、冬には葉っぱを落として枯れ木になる—毎年毎年、木はそれを繰り返していきます。

ご用がすんだからもう終わりの—というのではなく、命の続く限り繰り返します。

そして、次の代の木へ命のバトンタッチをします。

トウカエデは本当にすごいな、偉大だなと感じます。まさにこの木は本園のシンボルです。



2026年4月12日

木は、晴れの日も雨の日も、寒い日も暑い日も、風の強い日も嵐の日もどんな時も何も言わないで立っています。

人間だったら、きっと「疲れた」とか「もう嫌だ」とか、言っているかもしれません。

みすゞさんのこの詩は、人もまた、木の一生と同じように命の限り、自分の役割を果たしていくことが大切である…ということも併せて言っているのではないのでしょうか。



2026年4月16日

木の下から上を見上げると命の尊さ、素晴らしさを想います。見上げてみてください！

